
グアテマラの香り

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グアテマラの香り

【Nコード】

N9951C

【作者名】

冴島岐之

【あらすじ】

朝の七時、そこは僕と彼女だけの喫茶店になる。シリーズ。増えるかも。

グアテマラの香り * 01

「いらっしゃいませ」

カランカランと軽快なドアベルの音がした。僕は反射的に微笑みを浮かべると、入口へ体を向ける。今は朝の七時。この時間に来る人は一人しかない。

視線の先にはやはり、スーツで身を固めた彼女がいた。

「好きな席へどうぞ」と僕はいった。

彼女は僕に向かって小さく会釈をした。そうして着ていた真白いコートを脱ぎながら、いつもと同じ、窓際の隅の席へ向かってこつこつとヒールの音を響かせる。

今日のスーツはグレー。肩甲骨あたりで揺れる彼女の黒髪がよく映える。

年下だろうな、僕は思う。せいぜい二十五、六歳だと予想している。

もうすぐ二十八歳になる僕は結婚をしていない。何年か前に五年ほど付き合った彼女と別れてから、愛だの恋だのとは縁遠くなった気がする。

彼女が席についたのを横目で確認すると、お冷やとお絞りをのせた盆を左手に、右手にメニューを抱えてそこへ向かった。

この時間、ホールにいるのは僕一人だ。厨房では軽食の準備を、親父と東城という奴がやっている。

以前は僕も厨房にいたが、約一年前に東城が入ってからはホールの責任者に変わった。特に不満はない。むしろホールだけを見て、

考えていれば良くなったことから、仕事面での負担は大分減ったかもしれない。

僕が席に近づくと、彼女は顔をあげた。目があつてにつこり笑いかけると、彼女も笑ってくれた。

「失礼します」僕はテーブルの上にメニューを置く。「ご注文は？」

彼女はすべるように視線を動かし、「本日のコーヒーとクロックムッシュを」といった。予想通りだ。

はじめてこの店に来た日、食い入るようにメニューを見ていた彼女。その目がとても真剣で、僕は笑ってしまいそうになったのを覚えてる。

それから彼女はこのメニューしか頼まない。よほど気に入っているらしい。

僕はまどろっこしいとは思いつつも注文を繰り返し、彼女が小さく笑ってうなづいたのを確認すると、メニューをふたたび脇へ抱え、会釈をしてカウンターへ戻った。

サンドイッチはホールの担当だ。最近はずっと朝に来る彼女のため、クロックムッシュ一人分の材料がほぼ焼くだけの状態で用意してある。焼く以外の時間はほとんどかけず、僕は注文通りの品を手で彼女の席へ戻った。

今日のコーヒーは彼女がはじめて来た日と同じグアテマラ。酸味はあるが、揺れる湯気からは甘い香り。本日のコーヒーは僕の気分で決めている。

「お待たせしました。クロックムッシュと本日のコーヒーです」

音がしないように気を使いながら、彼女の前へ並べる。

「お客様」

「はい？」

「甘いものはお嫌いですか？」

「え」

突然の僕の質問に、彼女は困ったように目を見開いた。一見、仕事ができそうなしつかりしている雰囲気を持っている人だ。それなのにきょとした表情で見つめられると、一気に幼く見えてしまう。あの日、メニューを見つめていた時もそうだった。

「もしよろしかったら、お礼にこれをどうぞ」

そういつて僕は彼女の目の前にもうひとつ、小さなかごを置いた。中には数枚のアイスボックススクッキーが入っている。簡単で、昔よく母親が作ってくれたおやつの一つだ。僕はそれを焼くことを今日の朝一番の仕事にした。

「あの、お礼って……」

「毎朝通っていたいていますからね。今日はバレンタインデーですし、わたくしからのプレゼントです」

「え……あなたが作ったんですか？」

「僭越ながらわたくしが作らせていただきました。残していただいても構いません。勝手なプレゼントですからね。では、失礼します」

僕はもう一度会釈をし、彼女の顔を見ないようにして、わからないように若干足を速めてそこから去った。今頃になって心臓が騒ぎはじめたからだ。顔が熱い。

カウンターの中に戻った僕は、いつも通りにこれから来るであろう客のための準備をすすめる。厨房には厨房の、ホールにはホールの準備がある。バイトが入る九時まで僕は一人で店を仕切るのだ。いつもだったらすぐにできる仕事も、今日はなかなかすすまないさつきから彼女の席が気にかかる。味はよかったろうか。食べてくれるだろうか。迷惑に思っていないだろうか。明日から来てくれなくなったらどうしようか。

まずいことをしたな、僕は思う。

ここは小さな街角の喫茶店。もっとおいしい、居心地のいい店はたくさんあるだろう。

思わずため息が漏れそうになる。だが狭い店内では彼女の耳元まで届くだろう。そう思って息をとめた。

たったの三十分が、長い。

グアテマラの香り * 02

「すみません、レジお願いします」

ぼうつとしながらカウンターの途中でうろつろしていると、不意に声がかけられた。

「あ、はい」

我ながら間拔けた。いつもだったら彼女が席を立った時点で気付くのに、今日はどうかしている。

「……五四六円になります」

レジを打ちながら、彼女の手ばかり見つめてしまう。どうしたって顔をあげることができない。

「一〇〇六円ですね、お預かりします。四六〇円のお返しです」

一瞬、彼女の手に触れた。小さい手だ。指も細い。彼女の肌はきつと絹のようにさらりとなめらかで、触れようと伸ばしたこの手をすりぬけていくのだろう。

そんなことを考えている僕は、重症かな。すっかり彼女に恋をしている。名前も聞けずに。

そんな僕だからあれで精一杯なのだ。

いくつになろうとも、恋愛だけは、コーヒーを入れるようにうまくはならない。

「ありがとうございました、またお越しくださいませ」

丁寧に彼女へ礼をした。いつもだったら僕が顔をあげる前に彼女は店を出て行く。だが、一向にベルの音が聞こえない。

僕はゆっくり視線をあげた、彼女の笑顔があった。

「あの、タバタさん、ですよね」

「ああ、はい。そうです」

「あの、クッキーありがとうございました。おいしかったです」

「え？」

「また明日も来ますね。それじゃ」

「あ……あ、ありがとうございました」

彼女はヒールの音を残して、光あふれる外へ歩いていく。はじめて見た愛想笑いではない彼女の笑顔が、脳内に焼きついて離れてくれなかった。

まだ、走れるだろうか。

あの光の中へ。

＝ END ＝

カウンター * cake

「なーんかイヤなことでもあったんですかあ？」

急に視界に現れた顔に僕はぎょつとして、上半身をのけぞらせた。円い大きな黒目が楽しそうに煌めいて、にやりと口元が笑う。

「別に、なんもないよ」

「ホントですかあ？」

「ホントホント、なんもないって」

「えー？ この間はニヤついてたし、最近芳樹さんおかしいですよー？」

そういつて彼女、三島由希はずいとさらに顔を近づけてきた。昔からよく知っている相手だが、あまりの近さに僕は思わずドキドキしてしまう。

由希の性格からすれば、僕をからかってわざとやっているであろうことはわかっていただけれど。

「そんな顔に出てた？」

「ええ、それはもう。あ！もしかして、彼女あ？」

「違うよ」

僕は肩を落としてくたりと笑った。由希の目が不満そうに見つめ

てくるが、気にしない。

「僕なんかかまってないで、ほら、お会計行つてきな。五番テーブルのお客さん、そろそろ立つよ」

「はい」

由希はつまらなそうに唇をとがらせて、くるりと背中を向けた。肩口まで伸びた茶色の髪がさらりと揺れる。

そんなことをいつている間に、五番テーブルにいた若い女性の二人組が席を立った。由希はレジへ、僕はテーブルを片付けるべく布巾と盆を取りにカウンターの奥へ下がった。

さつきまで使っていて汚れ始めていた付近を軽く水で洗い、シンクに水を貯め漂白剤を入れた中に浸ける。そこから新しい布巾を取り出して、片手で軽く握り水気を取る。白いその布巾をいつもより少しだけ強く握って、ため息をついた。

そんな顔に出てたかな。しかもそれを、あの由希に指摘されるとは。

「へーい。やっときまーす」

「ケイ、返事！」

「はいっ！ わかりました！」

厨房へ向かって不満たつぷりといったようにそう叫びながら、東城慶太が両手に汚れた調理器具を抱えて入って来た。

シンクと冷蔵庫、横に長いテーブルが並んだ細長い部屋だ。厨房とホールを区切るようにこの部屋があつて、ここでは洗い物とデザ

ートを作ったりもする。

「あ！ せんぱーい、助けてくださいよっ」

「どうかしたのか？」

「滋樹さん、人使い荒いつすよー。俺、干からびそー」

「はは、気に入られてるんじゃないか」

「イヤッすよ、あんな愛情表現」

そうやってむくれた東城は、大学を卒業する今年からこの店に就職してくれることになった。

「しょうがないさ、喜んでるんだよ、あれで」

もちろん僕だって嬉しいと思っている。

東城の仕事ぶりには、目を見張るものがある。バイトとして入ってきたその日から、親父は楽しそうだった。それが、うちに就職を決めてくれたのだ。

「そつすかー？ ああもう、なんで先輩に似てないんだよ、滋樹さんは！」

「それは僕が似てないっていうんじゃないか？ でも、あんな親父には似たくないなあ」

くすりと笑いながら、東城が不満そうに調理器具をシンクへ入れるのを見ていた。

「まあ、昼のピークは過ぎたし、しばらくゆっくり洗い物でもすればいいさ」

肩を軽く叩いて、僕は背中を向けた。出入り口付近に並べられた盆を一枚手に取って、カウンターからホールへ向かう。

「先輩の鬼い！」

しっかり押し付けた食器洗いという仕事へ文句をいわれた気がしたが、ここは気にしないでおう。

時刻はもうすぐ二時。そろそろシフォンセットが始まる時間だ。

三時から五時までの二時間。これをめがけて来る主婦や昼の休憩がずれ込んでか、会社員も意外に多い。

うちの店のシフォンケーキは、母親が近所の評判からメニューに付け加えたもので、ちなみに今は僕意外に作る人はいない。作れる人がいない、というのか。

それは嬉しいことなのだが、僕には少しだけプレッシャーだ。

料理ができる親父もお菓子となると駄目らしく、母親も作り方を教えるということとはしてこなかった。

幼い頃から隣に立って、シフォンケーキを作る母親を見ていた僕としては、難しいことなど何もないのだが、他の人が作ったものは出せない、と親父はいう。

僕が初めて作った時も、親父は一口食べてまだ出せないな、といった。問題は慣れていなかった材料を混ぜる作業と手際の悪さだろう、と思っている。

空いた五番テーブルの食器を盆に乗せ、テーブルを綺麗に拭く。お客さんが綺麗に使ってくれていたようで、大して汚れてはいなか

った。盆を左手に持ち、最後に吹けなかった部分を綺麗に吹いて力ウンターへ下がる。

「由希」

「はい」

「この辺、綺麗にしておいてくれるかい？ 僕は奥でケーキ作り始めたんだけど、吉沢さんと二人でまわせる？」

「わかりました！ 大丈夫ですよー、ねー、吉沢さん」

由希は後方を見てにこりと笑った。吉沢さんはつい最近入ったばかりの若いアルバイトだ。大学一年生、まだ十八歳で、バイト自体初めてだと面接で恥ずかしそうにしゃべっていたのを思い出す。

「じゃあ、頼んだよ。あ、吉沢さん、ショーケースの電源わかった？」

「あ、はい！ つけて、あの、終わりました」

「そう、ありがとう。由希、優しくしてあげてよ？」

「わかってますよーだ！ 生憎私には芳樹さんみたいにイジメてよろこぶような性癖ありませんから」

「おいおい、変な言い掛かりつけないでくれよ。僕にだってそんな趣味は……って、性癖っていうと余計に如何わしいだろ」

軽く手の甲で由希の頭を叩く。柔らかい髪の毛の感触、由希はい

つまでもどこか子供っぽい。行動そのものに何か少女らしさを感じるのだ。見た目はきちんと女性だし、考え方だってしっかりしている。行動と見た目、そのアンバランスが好印象を与えているのだろう。

「とにかく、頼んだよ」

いいながら意図的に笑ってみせた。由希はともかく、吉沢さんが緊張しないようにと思ったからだ。何せまだ店で働くのは二回目なのだ。

二人の返事を聞いてから、僕はカウンターの奥へ引っ込んだ。

「終わった？」

丸まった背中に、僕は笑いを堪えながら声をかけた。

「終わる訳ないじゃないっすか！」

東城が洗い物をしていた手を止めて、横に立った僕をきつと睨んできた。東城は俺より背が低いし、今は腰を屈めているから見上げるような視線だ。

あまりに素直な反応を返してくれるものだから、ついからかいたくなって、それがまたおかしくて笑ってしまう。

「悪かったよ、そう怒るなって。東城がよく働いて、しかも親父の相手もしてくれるから僕はとっても助かってるんだ」

「それ、遠回しに俺にイヤな役目を押し付けてるっていいたいんすか？」

「さあね」

東城という奴は本当におもしろい、と僕は思う。

「先輩、俺のことからかってるだろ」

「気のせいだよ、さ、仕事仕事！」

今月はノーマルとストロベリーのシフォンケーキだ。とりあえず二つずつ作っておけば問題はないだろう。僕は早速作業に取りかかった。

「先輩」

「何？」

「疲れてませんか？」

東城がそう聞いたことに僕は驚く。

「お前でも人の心配するのか」

「ちょっと、いくらなんでも失礼っすよ。なんすか、その本気で驚いたような顔。心外です」

だって、本当に驚いたんだ、という台詞を呑み込んだ。心配してくれたというより、それを指摘されたことに。代わりに小さく苦笑いをしていた。

自覚はしているけれど、少しばかり落ち込んでいることを。けれど、顔や態度にそれを出してしまっているなんて、この僕が。

「そんなにわかりやすいかな？」僕は首を傾げてしまう

「まあ、ぱつと見気付かないっすよ？ なんすかね、長年の付き合いから来る勘？」

「知り合ってどれくらいだ？」

「一年とちょっと？」

「どこが長年の付き合いだよ」

「はは、ホントだ。結構短いっすね」

二人してくすぐすと肩を揺らして笑った。

ここは、あまりに居心地がいい。東城も、由希も、親父も、料理長も、他のアルバイト達も、コーヒーの香りも、オーブンから香るシフォンケーキの甘い匂いも、お客さんの声だって、この店のすべてが僕を癒して、やさしくしてくれて、このまま他に何もいらないうと思った。

だけど。

「もう走れないからかな」

結局僕は諦めて、平穩なこの場所から動けないだけなのだ。そんなこと、もうずっと昔から理解している。

また明日来ると、名前も知らない彼女はそういった。それが、来なかっただけのこと。もうすぐバレンタインデーから一週間経つ。

ただ、それだけのことなのだ。

朝七時、僕は彼女のために店を開ける。彼女を待っている。それがいつの間にか当たり前のように思ってしまった。

彼女はただの常連客の中の一人にしか過ぎなかったのに。

「先輩？」

「東城が心配することじゃないよ」

僕は笑って、東城が何かいいたそうにした言葉を遮った。これは、他でもない僕自身の問題でしかないのだ。

それから黙って、シフォンケーキ作りの作業を再開した。顔と、心と違って、手はいつも通りに手際よく作業をしている。

甘いお菓子は、食べる人を幸せにするためにある。たとえ作り手がぼろぼろに泣き崩れていたとしても、ケーキにそんな感情はいらないのだ。

食べる人が幸せな気持ちになれるように、僕は右手を動かした。

カウンター * k o f f e e

午後七時のラストオーダーの時点で客は二組あった。会社帰りと思われる女性と、近所の老夫婦。どちらもよく見る顔で、老夫婦は必ず月に一度、二人で仲良く訪れる。

「由希、吉沢さん、今日はお疲れ様。奥で休んでおいで」

「えっ、でも」

「うわ、イイにおーい！ 行こ、吉沢さん。慶太ア、二人分よそつてー」

奥から、反響しているためか、くぐもった男の声が何かをいった。聞き取れず、由希が

「なーにー」といつて奥に歩いていく。戸惑う吉沢さんと僕だけがカウンターに取り残される。

「しょうがないな、由希は。ほら、吉沢さんもいつておいで」

「でも、」

「いつもこうなんだ、やることあるしね。ここは僕一人で平気だから、冷めない内に食べておいでよ」

「あ、はい。すみません」

「気にしないで。じゃあ、お疲れ様」

「お疲れ様ですっ」

ぺこりとお辞儀をして、吉沢さんも奥へひよこひよこと歩いていく。小さな背中に、ひとつに結んだ髪の毛がさらさらと揺れていた。彼女の背中に、少しだけ似ている。もう少し背が高かったら、きつと。

ぼんやりとカウンターに立ちながら、器具やカップを丁寧に拭いていく。グラスは傷がないか、曇っていないかよく見て、さつと濡れた布巾で棚を吹いてからしまう。

七時二十分を過ぎた頃、窓際の奥の席に座っていたスーツの女性が席を立つのを、視界の端で確認し、僕は静かにレジへ先回りする。

「失礼します」

上着を片手に、スーツの女性はレジのカウンターに伝票を出した。僕はそれを受け取り、レジを打つ。いつもと同じ、ホットのカフェオレ。それから、

「いつもありがとうございます。お会計、五四〇円になります」

女性が財布を取り出す間に、レジに出された『スノーボール』と呼ばれる、粉砂糖をふんだんにまぶした、丸いナッツのクッキーが五、六個入った透明なビニールの包みを、紙袋に入れた。

このクッキーはランチが始まるのと同じ十時から、レジに置いて販売しているものだ。この女性は店に来ると必ずといっていいほどこのクッキーを買っていつてくれる。

「五五〇円、お預かり致します」

袋を差し出し、僕はまたレジを打った。

「一〇円のお返しです」

女性がお釣りをしまい、財布を鞆に戻すのを見てから、僕はありがとうございましたと頭を下げた。

「ごちそうさまでした」

小さな声でそういい、すぐにベルの音が静かな店内に響く。律儀な人だ、思ってた静かに笑った。窓の外を見ている顔は、いつも眉間にしわがよっているけれど。

顔を上げると、老夫婦が小さく談笑している声が聞こえた。この時間、僕はいつも笑いたくなる。微笑ましいというのか、とにかく、とても幸せな時間だと思える。

一日が終わる、急いでいる人もいない。わからないけれど、それはほんの僅かな違いなのだろうけれど、お客さんと同じ場所を共有している。それが閉店間際のこの時間だと、より一層近くに感じられる、というのだろうか。

カランカランとベルが高らかに鳴り、僕は驚いて入口を見た。確かに入口のプレートは『closed』にしたはずだ。先程の女性が目忘れ物でもしたのだろうか、思ったけれど、視線の先には違う人がいて、僕は言葉をなくしてしまった。

こんな時間に、来るなんて。

「え、と……閉店なんですが」

僕は戸惑いながらも、そう口にした。僕がしゃべらなくてはきくと、沈黙のままだと思ったからだ。

「あ、あ、知ってます。いや、あの、注文したいわけじゃなくて、」

彼女は寒さのせいか頬を真っ赤にさせて、拳動不審に目を泳がせる。ああ、朝見るときの彼女と変わらない、同じ人だ。そんな彼女の様子に、僕は何故だか落ち着いてきて、じっと彼女を見ていた。

「……久しぶりです、タバタさん」

そういつて、彼女はにこりと笑った。こっちまで力が抜けそうになる、そんな笑顔だった。

「お久しぶりです。どうぞ、カウンターにでもお座りください」

僕はさりげなく彼女を店内へ促し、カウンターの中に戻った。彼女も歩きながら羽織っていたコートを脱ぎ、カウンター席に腰掛ける。隣の椅子にいつもの小さな鞆を置き、背もたれにコートを掛ける。

いつもより距離が近い。そう考えるとやはり、ドキドキしてしまう。

「どうしたんですか、こんな時間に」

「いや、あの、今仕事の帰りで」

「それはそれは、お疲れ様です。コーヒーでいいですか？」

「えっ、でも時間が」

「内緒ですよ」

くすりと笑い、カップを取り出した。その時ちらりと窓際の席に座る老夫婦のテーブルを確認し、そろそろだ、と思う。

僕は三人分のコーヒーを用意すると、彼女の前にひとつそれを差し出した。

「すみませんが、ちょっと待っていてくださいね」

彼女がどこかぼうつとしながら頷いたのを確認すると、僕は盆に二つのコーヒーカップを置き、老夫婦の元へ向かった。

「失礼致します。食後のコーヒーをお持ちしました」

カチャ、と小さな音を立ててテーブルに二つのコーヒーを置く。老夫婦はにこにこ笑い、ありがとう、と小さな声で呟いた。

「お済みのお皿はお下げしますね」

そういつて、僕は空になったオムライスとピラフの皿、コンソメスープの器を下げる。

「失礼致しました。ごゆっくりどうぞ」

小さく礼をし、ゆっくり、けれど大股でカウンターへ戻る。まだそこに彼女の背中があることを確認して、口許がゆるんだのがわかった。

簡単に下げた食器の片付けをし、彼女のちょうど前になる位置へ戻る。

「今日は、どうされたんですか？」

「あ……すみません、あれから来れなくて」

「いえ、お元気そうで何よりです。クッキーに当たったのかと思いました」

「まさか！」

そういつて、僕も彼女も笑う。久しぶりの感覚に僕は、感動しているのだと思う。

「なんか、すみません」

「なんで謝るんですか？」

彼女は僕の目を見てからすぐにうつむいてしまう。指先でカップの淵や取っ手をなぞるように動かしながら、ぽつりぽつりと話し始めた。

「あの、私、突然来なくなつて……感じ悪かったな、と思つて。今日は早く帰れたんでもしかしてと思つて、こっちの道来たんですけど、そしたら灯りがついてて……もう、本当にすみません！ なんか、押し掛けたみたいになつて……忙しいですよ。やっぱり私、帰りますっ」

席を立とうとする彼女を見て、僕は焦りから心拍数が早まるのがわかった。もう少し話がしたい、そう思っているのは僕だけみたいだ。

「そんなに、急いでますか？」

「いや、そういう訳では、」

「でしたら、僕の話し相手になってくれませんか？ やることな
くて、退屈していたんです」

困ったように彼女は僕を見上げる。

「あの、お邪魔じゃないですか？」

「そんな訳ありませんよ。まあ、僕の話が退屈かもしれませんがね」

「そんな、」

安心させるように、僕は意図的に笑った。仕事以外の人と、こんな風に余裕を持って話すことなんて、最近ほとんどない。

「すみません……」

「なんで謝るんですか？」

「いや」

彼女はほんのり顔を赤くして、カップを見つめながら息を吐いた。

「なんか、カッコ悪いなあと思って。私、」

うつむいた彼女はまたカップを指先でなでまわし始めた。逆に僕は言葉の続きが気になって静かにグラスを置いた。

「その、バレンタイン、私、彼氏とかいなくて、女友達でその、飲みに行つて、その後もなんか、仕事でミスしたりで……集中しろつて上司には子供みたいな説教されるし……ホント、カッコ悪い」

ほぼ一週間だ、彼女が来ない朝を、僕は五日間過ごした。土日は大抵来ないから、少なくとも三日だ。それをとてつもなく長く感じた。

常連だったから、彼女だったから、僕は気になつて仕方なかった。なれないことは、恋愛ゴトはするものじゃない、何度思つただろう。

「僕も」

彼女がゆつくり、顔を上げるのを待った。大きなガラス窓にくつつけられた白い『koffee space』の文字。母ちゃんの名前は桐子だからな、という理由でコーヒーの頭文字が『k』らしいが、お陰で中学校で恥を書いた記憶がある。

「僕も、同じです。バイトに、何かあつたのかつて、いわれました。僕個人の問題なのに、それを仕事に、顔に出すなんて、カッコ悪いですよ」

ゆつくり、彼女に視線を戻す。うるさいくらいに周りが静かに鳴つたような錯覚が、僕の鼓動をおかしくする。

ようやく視線がぶつかった。カウンターを隔てた向こう側、まるで隔絶されているような気分になる。踏み入れてはいけない壁のようだ。

それでも、そのカウンターの向こう側で、彼女は笑った。くたりと、見ている僕までもが力の抜けそうな、やさしい顔で。

「タバタさん」

「はい」

「タバタさんの名前、教えてください。あ、漢字も」

お菓子みたいだ、と思った。彼女はとてもやわらかくて、見ているだけでそれこそ幸せな気持ちになれる気がする。香りで酔わせる甘い焼き菓子のような。

「タバタは、田んぼの田に隅という意味の端です。名前は、芳樹といます。ヨシは芳香の芳で、キは難しい方の木ですね」

「ホウコウ……芳香剤？」

「そうです」芳香剤か、思ってくすりと笑った。

「失礼でなければ、僕からも名前をお伺いしてもよろしいでしょうか」

「あ、城戸崎です。城戸崎美紀。城の戸に、よくある山崎とかの崎、美紀は美しいに、糸偏に己って書きます」

美紀さん、唇だけで名前を呼ぶ。忘れないように、刻むように。美紀さんはカップを右手で持ち上げると、こくりとコーヒーを飲んだ。美紀さん、もう一度呼んでみる。彼女は気付かない。

「田端さんは、店主、店長さんなんですか？」

「ああ、違います。店長は奥で料理作ってる、僕の父親ですね。僕は接客専門です」

そうはいつでも、親父は滅多にホールに顔を出さないから、お客さんから見たら毎日開店から閉店まで店を仕切っている僕が店長に見えているかもしれない。

実際、経理だとか、とにかくこの店に関わるすべての金銭と雇用関係のこと、シフトを決めるのは僕の役目だ。親父は料理を作るくらいしか能がないから。

「そうなんですかー、それは大変……って、そろそろ帰らなきゃ」

腕時計を見て、美紀さんはそういった。僕は壁に掛けてある時計に目を向ける、七時四五分。

「……そうですか」

僕は少しだけ寂しいと思った。けれど急いでコーヒーを飲み干す彼女に、まだいてくれなんていえない。そんな権限も、僕にはない。美紀さん、喉の奥で名前を呼んだ。思いがけず目が合う。

「家で待ってるんです、犬が」

「犬？ 飼ってるんですか」

「ええ、そろそろお腹空かせてるだろうから」

「すみません、引き止めてしまつて」

「いいえ、楽しかったです」

にこりと笑った、それを見て、今度は心臓が掴まれたみたいにぎゅっと苦しくなった。

彼女がおかしいんだろうか、僕がおかしいんだろうか。わかっているけれど、考えずにはいられない。考えて自制していないと、それこそおかしいことを口走ってしまいそうだからだ。

「あの、」彼女はカウンター席から立ち、カバンを持つ。すでに上着は着込んだ後のようだ。

「何か？」

「明日も来て、いいですか？ えと、朝に」

見上げたままそういった彼女に、僕はしたたと何度かまばたきをした。明日も、か。

「もちろんです。いつものメニューで」

「はい、いつものメニューで」

そういつて、僕と彼女は笑い合った。明日は定休日だけれど、それは秘密だ。

「お気をつけて」

ドアから出る直前、そういった僕に美紀さんは振り返って笑った。「また」小さく手を振る右手が見える、それだけで僕の口許がゆるんだ。また、会える。それだけだ。

見回した店内には、まだ一組の老夫婦がコーヒーを飲んで談笑する姿があつた。

この場所は、あたたかい。

〃 E N D 〃

不機嫌な休日

その日はすこぶる調子が悪かった。

まるで水のような、さらさらとした鼻水が気を抜けばたらりと垂れてくるし、頭の中ではどこかで道路工事でも始まったかのようなあの鈍い音が、一定のリズムで僕を攻めたててきた。

風邪でもひいたかな。

そう思っただけでまだ日の昇らない、暗くて静かな台所でいつだか買ってた薬を探した。ところがこういうものは、必要なときに限って見つからないのだ。

大の男がひとり立つには十分なスペースがあるが、決して広いとはいえない古びた台所で、僕は改めて大きくしゃみを一発かました。

先程よりも多少は粘りのある鼻水がだらつと出てきたのを感じて、思わず

「ずずーっ」と音を立てて鼻をすすった。

自分のくしゃみの音にすら視界がぐらりと揺れるような衝撃を味わっていたためか、勢いよく空気を吸ったせいでそのまま後ろに倒れそうになる。

まいったなあ。

それでも今日は土曜日だから、店は絶対に開けなくてはいけない。折角の稼ぎ時だ。店さえ開けてしまえば、後はどうにでもなるだろう。親父だって起こせば使いものになるはずだ。

僕はふらふらする体をなんとか動かしながら、薬を諦めて自室へ戻ることにした。

それから僕が開店準備をはじめたのは、二十分程後のことだ。その間に三回くしゃみをして、箱のティッシュをひとつ、使い切ってしまった。

あつという間に、朝日は昇る。室内にいるせいでどこに太陽があるとか、どれほど昇ったとかいうことはわからない。だが、喫茶店ということもあって窓の多いそこでは、電気をつけなくても新聞を読めるくらいには日の光が入ってきていることに気が付いた。

「だりイ……」

誰ともなく、そういった。それはいつもと違うぐもった鼻声で、まるで他人の声のように思えた。誰もいなくて静かな店内では、余計に響いて気持ちが悪かった。一体僕はどこに行っただ。

今は五時三十分を少し過ぎたところ、店を開けるのは七時ちょうどでいい。今日は、彼女は来ないだろう。平日なら七時に来る彼女のために十分前に開けるけど、土曜日は彼女の仕事も休みらしい。めったに店に來ない。

あれから僕たちは、朝の時間、少しだけ会話をかわすようになった。世間話も仕事の話もする。

僕は太抵聞く側だけれど、自分が入れたコーヒーを彼女と一緒に楽しめることが嬉しかった。たまにクッキーも焼く。僕は久しぶりに、朝ごはんというものを楽しんでいる。

簡単に掃き掃除をして、テーブルやイスを丁寧に拭いてまわる。開店前と閉店後に必ずする仕事のひとつだ。途中で思い出して、この三日間で溜まっていたゴミ袋を外に出した。ゴミ収集車が来るのを店の中で待つ。多分、来るのは六時だ。それまでに、今日のコーヒーを落としておこう。

本日のコーヒーは昨日届いたばかりのモカ。それからブレンドは、酸味を強めにして、残っていたブラジルとグアテマラを使ってしまおう。

そうだ、それから今日は、新しいシフォンを出すんだったか。なんだっけ、マンゴー。ああ、イヤだ。あれ、嫌いなんだよなあ。なんで今の女の子って、ああいうのが好きなんだろうか。

「……、仕事しろよ、僕は、なにやってんだ」

考えながら、ちょうどフロアの真ん中でぼーっと突っ立っていることに気が付いた。

本当に、何をやっているんだ僕は。ちっとも開店準備が進まないじゃないか。

ようやく最後のテーブルを拭き終えたところで、車の音がした。ゴミ収集車だ。一応、外に出て挨拶をする。いつものおじさん二人組みだ。適当に世間話をし、ぺこりと頭を下げ、収集車に乗り込んだところまでを見届けて、店に戻った。

今、何時だろう。そう思ってふと時計を見た。五時三十分だ。五時三十分？ おかしい、確か、僕がここに来た時間も五時三十分だった。よく見たら、秒針が動いていなかった。

「、マジかよ……」

いつから止まっていたんだ。ついさっき、止まったってことか？
どちらにしても、今の時間は何時なんだ。多分、さっき収集者が
来たばかりだから六時過ぎだけど、このままじゃ確実に困る。この
店に時計は、あれひとつしかないのだ。予備の電池なんて、ない。
あっても、場所がわからない。

どちらにせよ、仕事が増えたことに変わりはない。なんだってい
うんだ。今日は、ついてない。

ため息をつこうと思ったのに、途中で盛大なくしゃみに切り替わ
った。手近なところにティッシュはない。しょうがなく、テーブル
の上にセットされている紙ナプキンで鼻を拭いた。痛い。

「コンビニ、行くか……」

もしかしたら、風邪薬とかも売ってるかもしれない。最近、コン
ビニでも売れるようになったとか、なっていないとか。とりあえず行
ってみたいことにははじまらない。

一度店の奥の階段を上り、自分の部屋へ戻った。携帯を探す。黒
の二つ折り。サブ画面で時刻を確認する、六時十三分。カーデガン
を一枚羽織り、これまた黒い、三つ折りの安っぽい皮の財布を持っ
て、急いで店を出た。階段は昇るときよりも下りるときの方が頭に
響くことがわかった。

駅の近くのコンビニまで、歩いていく。店から駅まで、実は五分
もあれば着く。意外とうちの店は、便利な場所にあるのだ。そのわ

りに人通りはそんなに多くないけれど。

ドラッグストアが開いていないかな、なんて小さな期待を抱きながら、カーデガンのボタンを掛ける。大きな道路に面した交差点に出て、右へ曲がった。駅のホームが見える。その右下方に、赤いNの看板。改札をはさんで反対側にあるドラッグストアは、残念。シヤッターが降りていた。

ため息をついて、とりあえず僕はコンビニを目指して歩いた。

「いらつしやいませー」

ピロロンだかピンポーンだか音がして、どこからか店員に声をかけられた。風邪薬と、電池。忘れないうちに電池を掴む。単三でよかったよな。それから、剃刀だとかマスクとかが置いてあるところで、風邪薬を探してみた。ない。代わりに冷えピタなるものを手にとった。熱は測ってないが、頭が痛いんだからいいんだろう。あと、ポケットティッシュ、買っておこうかな。そう思って、ティッシュが五個ほど入っている袋に手を伸ばした。

「田端さん？」

「うあ、」

驚いて、冷えピタの箱を落とした。在庫の補充をしていた店員に睨まれる。誰だ、声のした自分の左後ろに首をやる。

「き、城戸崎さん、」

「ごめんなさい、驚かせてしまったみたいで」

声が少し、裏返った。変な声だ。かつと体が熱くなったのがわかった。

緑のパステルカラーのトップ。そのシンプルな生地は、白いレースで胸元と裾が装飾されて、上からそれとお揃いの、丈の短い羽織を着ている。下は、青いタイトジーンズだ。思った通りに、足が細い。彼女の私服、はじめて見たな。髪も、ひとつに縛っている。ポニーテールってやつか。いつも下ろしているけど、こうしているとやっぱり少し幼く見える。

そんなことを考えているうちに、彼女がしゃがみ込んで僕が落としたものを拾ってくれる。

「あ、すみませんっ」

「いいえ、私が悪かったですもん。田端さん、風邪ひいてるの？
鼻声、」

「ああ、やっぱり変ですか、声」

「少し。あ、私、薬持ってるかも。風邪薬じゃなくて、頭痛と発熱に効くやつだけど、いりますか？」

「ああ、お願いします。……とりあえず、これ買ってからでもいいですか？」

カバンから薬を取り出そうとしている彼女を見て、僕は苦笑いを浮かべながらそういった。ぱつと動きが止まり、彼女の頬がほんのり赤くなる。

「そう、ですね」

それから、二人でコンビニを出た。寒いなあ、ぼんやりそう思った。三月に入ったが、朝はまだまだ冷え込んでいる。忘れ雪、降るかな。

「城戸崎さんは、こんなに早くから何してたんですか？」

何気なく、となりを歩く彼女へ話しかけた。あまりこうして並んで歩くような機会はないから、改めて彼女は背が小さいんだな、と思った。一五五センチくらい、だろう。僕は、一七九センチはある。親父に似たんだろうけど、それでも六センチほど、親父の背には足りない。

「友達の家で、飲んでたんです。気が付いたら終電なくって、泊まって来ちゃったからこんな時間に帰宅してるんですよ。今日も買い物行こうねって約束したから、一度家に帰って服とか、着替えようと思って」

小さく、彼女が笑った。うつむき気味だったけれど、確かに笑っているような声がした。それになんとか僕まで嬉しいような気持ちになった。

「いいですね、いつてらっしゃい」

「田端さん、もしかして今日もお店、仕事、してるんですか？」

「え、はい。休日は、稼ぎ時ですからね」

僕がそういうと、彼女は困ったように眉を寄せた。何か、考え込んでいるようだ。

「、なんですか？」

「ダメです」

「は？」

「ダメですよ、風邪ひいてるのにつ」

「いや、大丈夫ですよ。大したことないし。僕がやらないと、店は開かないし」

さつき曲がった道を、曲がる。今度は左に。曲がったところで、彼女が立ち止まった。つられて僕も二、三步先で立ち止まる。

「？ どうしたんですか うわ、」

「ほら、熱ある！ 絶対ダメですってっ」

急な接近にドキドキして、元からあった頭痛が激しさを増したような気がした。ヤバイな、そうは思えど、冷たい彼女の手はとても気持ち良いし、体もだるいのでそのままにしておいた。

彼女は少し、怒っているようだ。

「でも、仕事ですから」

僕は苦笑いをしながら、彼女の眉間の皺が消えないかなあと思う。この人は、こんなに感情豊かだったのか。僕なんかの心配までしてくれて。でも、普通の人なら誰でもする気遣い、だろうか。

とりあえず、僕は早く帰って開店準備をしなければならない。も

う、あまり時間はなさそうだ。

「そんなことって、田端さんっていつ休んでるんですか？」

「……水曜日、とか」

「それでも毎朝、お店を開けるのは田端さんでしょう？」

「まあ、あそこは僕の家だし、」

「たまにはちゃんとした休養とらなきゃダメですって！」

「そついわれてもなあ、」

誰かが代わりに仕事をしてくれるわけではないし、僕は困って鼻の頭を掻いた。もしかしたら彼女は、まだ酔っているのかもしれない。でもそんなこといったら、ますます怒りそうだ。

「とりあえず、店に行きましょう。寒いでしょう？」

僕がそういうと、彼女は少しむすっとしたまま、歩き出した。彼女の歩調に合わせるように、僕もとなりを歩く。その場の空気はあまり居心地のいいものではなかったけれど、彼女がそうしていつてくれたことが僕は嬉しかったから、多分、笑っていただろう、と思う。

店まで行くと、僕は彼女を中に入れた。

「何か、飲みますか？」

「いいです、」

「じゃあ、適当に座っててください」

僕はとりあえず、止まった時計の電池を入れ替えようと適当なイスを動かす。

「、何してるんですかつ」

「何って、電池、換えるんですよ」

「危ないですよっ」

「平気ですって、」

僕がくつを脱いでイスの上に乗ろうとすると、彼女が慌てたように近づいてきた。その姿にまた苦笑い、ただの風邪なのに。

「わ、私がやりますから、田端さんは他のことしてくださいっ」

「でも、」

断ろうと考えて、止めた。彼女はなんだか、とても口煩い。ここでいい合うよりも、素直に代わってもらった方がよさそうだ。僕は乗せていた左足を下ろして、またくつを履いた。

「じゃあ、お願いします。気を付けてくださいね」

「はいっ」

やっぱり、酔っているのかもしれない。嬉しそうに笑って返事をした彼女は、いつもとはまるで別人だった。本当に子供のようだ。もしかして、彼女の方が不安定な高い場所に上るのは、危ないかもしれない。

僕は心配になって、彼女がイスへ昇ろうとするのを見守る。カタ、と少し揺れたが、彼女は無事にイスの上に上がり、時計に手を伸ばした。

「芳樹、おめえ、さっきどこ行ってたんだ。店ほったらかしにしてよー」

「　　つ、あ」

「　　うわ、」

声に驚いてか、彼女がバランスを崩して倒れてきた。僕は慌てて彼女の体へ手を伸ばす。すっぽりと腕に収まった。けれど、僕の足は勢いに耐え切れずに呆気なく倒れてしまう。背中からフロアに落ちた。嫌な、大きな音が店中に響く。

「……………なにやってんだ？」

「　　つ、てえ」

目を開くと、天井が見えた。肩を打った、背中も。こんな痛い思いをしたのは何年ぶりだろう。視界がぼんやりしている。

「　　う、ごめんなさいっ」

腕の中で、声がした。彼女だ。首を少し動かして、どうなってるのか見る。とりあえず、怪我はなさそうだな、時計も割れていないし、良かった。そう思って、寝転んだままさっきの声の主を探した。

「んだよ、親父。めずらしく早起き」

「おめーのくしゃみがうるさくて起きちまったんだよ、で、何やってんだ？」

僕はため息をついて、腕の力を緩めた。「立てますか？」

彼女は何もいわず、僕の体について起き上がった。それを見て、僕も起き上がる。彼女は相当驚いているらしく、僕の足の間に収まったまま、動かない。

「ああ、ごめんなさい、私、」

「怪我は？」

「ダイジョブです……」

頭が痛いな、そう思ったけれど、倒れたせいなのか元々の頭痛なのかはわからなかった。

「きれいな人だな、お前、朝から何やってんだ」

「別に、」

とても説明する気にはなれない。面倒だ。とりあえず僕は立ち上がって、腰でも抜かしたみたいにあたとフロアに座り続ける彼女

を立たせた。腕を引っ張って、腰に手を回す。さつきも思ったけれど、彼女はとても軽い。

「この人はうちの常連さん。朝来る人だから、親父は知らないだろ。城戸崎さん、この人、一応この店の店長」

「はー、どうも。なんだ芳樹、彼女じゃねーのか？」

「起きたなら開店準備手伝ってくれよ」

「なんだおめえ、風邪か？」

「まあね」

僕は親父を睨む。この人は、とても勝手な人だ。気まぐれで、奔放。その上頑固だ。

「はー、そうか。じゃあお前、知里姉妹に電話しろ。一時間早く来てもらえ。それからそっちのお嬢さん、城戸崎さんか？　なんか悪いことしたみたいだな。その上悪いんだが、暇ならそのバカ息子の面倒見てやってくんねーかね？」

「なにいつてんだよ、いきなり。仕事ならやる」

「あ、はい。よろこんでっ」

「　　っ、城戸崎さん？」

驚いて彼女を見る。「だって、予定、あるでしょう？」

「いいんです、」照れたように顔を伏せて、彼女は笑った。

「風邪は甘くみちやいけませんよ。それに、今日の約束はどうして
もって訳じゃないし、いつもおいしいコーヒーいただいてますから
ね」

「……っ」

「、どうかしました？ 顔、赤いですよ。もしかして熱、上がりま
した？」

「なんでもないです、」

視界の端で、親父が笑って僕を見ているのがわかった。くそ、声
には出さず、小さく罵る。あとで、絶対からかわれる。こういうと
きの人間はしつこいのだ。

僕は彼女の腕から時計を受け取って、親父の顔の前に突き出した。

「電池、換えとけよな」

「怖いねー、うちの息子は」

けたけたと嫌な笑い声を発する親父を極力視界に入れないように
しながら、奥の階段へと向かった。

「今日は頼まれたって店には出ないからな、」

「あ、待ってください。田端さんっ」

「お姉さん、俺も田端だよー」

「あ、そうですね。えと、芳樹さん、待ってくださいっ」

律儀に親父のからかいに答えながら、慌てたように彼女が追いかけてくる。その足音を聞きながら、思わずにやけてしまう自分。

「あんまり泣かせるんじゃないぞ」

「うるせーよ、なんで泣かせるんだ。意味わかんねー」

階段を昇りながら、今の自分の部屋の様子を思い出す。問題はな
いはず、だけど。

「あの、芳樹、さん？ 私は、どうしたら……」

自分の部屋の前まで来て、立ち止まる。ずいぶんと久しぶりだ。
部屋に女性を入れることは。そのことにひどく動揺している自分。
いや、熱のせいだ。僕は今、風邪をひいているんだ。

「着替えるんで、少し、待っててもらえますか？」

「、はい」

急いで部屋の中に入って、一気にしゃがみ込む。ため息。これか
らどうしよう。痛む頭を両手で抱え込みながら、これからの時間を
一体彼女とどう過ごしたらいいのか、必死になって考えていた。

＝ END ＝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9951c/>

グアテマラの香り

2010年10月12日22時41分発行